

令和5年8月8日

豊田市議会議長 木本 文也 様

産業建設委員長

水野 博史



委員派遣実施報告書

本委員会は、下記のとおり委員派遣を実施しましたので、豊田市議会委員会条例第37条第1項の規定により、報告書を提出します。

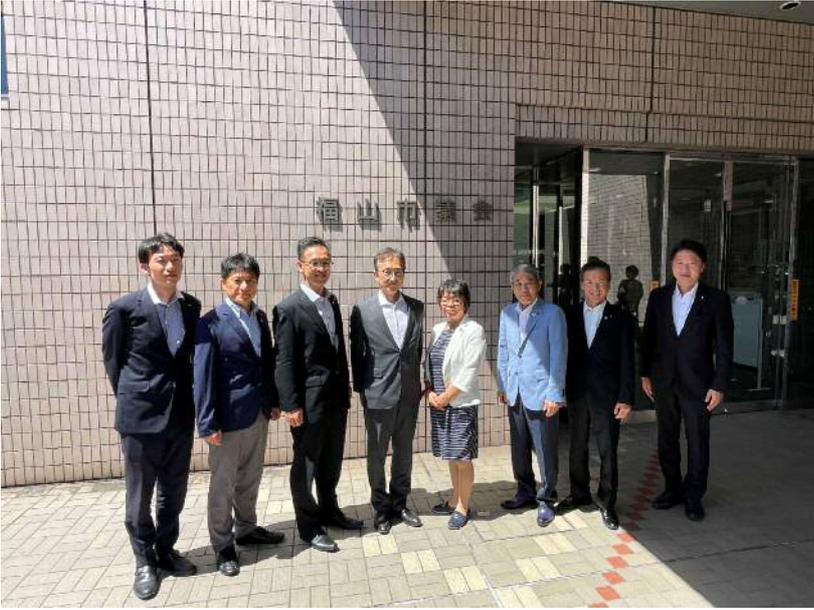
記

- 1 派遣期間 令和5年8月1日（火）から同月3日（木）まで
- 2 派遣場所 及び内容
1日（火）広島県福山市 ウォーカーブルなまちづくりの推進
2日（水）福岡県福岡市 スタートアップ企業の支援
3日（木）熊本県熊本市 震災後のインフラ整備による地域経済のけん引
- 3 派遣委員
委員長 水野 博史
副委員長 寺田 康生
委員 山田 主成、大石 智里、吉野 英国、日當 浩介、
中島 竜二、兵藤 慎也
- 4 報告内容 視察報告書のとおり
- 5 随行者 河橋 敦子、村瀬 康久

視察報告書【1】

委員会名	産業建設委員会	委員名	水野 博史
視察日時	令和5年8月1日（火） 午後1時00分～午後2時30分		
視察先・概要	広島県福山市 人口：458,706人（R5.6.30現在） 面積：517.72km ²		
視察内容	ウォーカブルなまちづくりの推進		
選定理由	福山市では、駅周辺を人や企業を惹きつける魅力あるエリアとするため、官民連携により、公園・広場・通り・建物の路面階などの空間を一体として、人中心のウォーカブルな空間に変えていく取組を進めている。視察を通して中心市街地のさらなる活性化に向けた取組を学ぶことを目的とする。		
豊田市の現状と課題	豊田市でも都心環境計画や都心交通ビジョンにおいて、歩行者と公共交通が優先され、歩行者が安全・安心に回遊できる都心を目指すこととし、また国土交通省からもウォーカブル推進都市としての選定を受けている。今回、事業をさらに推進させるためにも、先進的な自治体の取組を調査、研究する必要がある。		
視察概要	<p>●再生ビジョンとデザイン計画 2018年福山駅前再生ビジョンを策定、2020年福山駅周辺デザイン計画を策定した。 目標年次を概ね20年と定めた再生ビジョンに基づき、駅前のエリア価値を戦略的に高めるため、10年を計画の1期とする福山駅前デザイン会議を設置。会議では、従来「計画する人→つくる人→使う人」というプロセスで行われてきたまちづくりを逆転させ、「使う人→つくる人→計画する人」というバックキャストイング手法により市民や事業者など、まちをつかう人が考え計画に結び付けてきた。</p> <p>計画では、福山城や駅、中央公園、商業施設等の6か所をまちづくりの核とし、それらをつなぐ主要な通りを含む範囲を、ウォーカブルエリアと設定している。</p> <p>●官民連携によるまちづくり 駅前再生に向けては官民連携により①リノベーションまちづくり、②エフピコRiMリノベーション、③道路空間の活用（ウッドデッキ整備等）等、多くの再生事業を進めている。特に、実在する空き物件を題材に、事業プランを練るリノベーションスクールでは、20件以上の新事業がスタートするなどの成果が出ている。 ※当日は担当執行部（福山駅周辺再生推進課）から、会議室において説明を受けた後、実際に駅周辺の整備状況を歩きながら現地視察を実施。 ※ウォーカブル：walk（歩く）+able（可能とする）を組み合わせた言葉であり、2019年度に国土交通省がウォーカブル推進都市の募集を開始している。福山市も同年度賛同表明をしている。</p>		

<p>評価とその理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・福山駅前再生ビジョン策定では、福山市の「顔」として、市民・事業者・行政が目指す福山駅前の姿「働く・住む・にぎわいが一体となった福山駅前」を共有することからはじめ、官民連携による再生を行うことの方角性をはっきりと示した。 ・その後ビジョンの実現に向け、具体的なソフトとハードのプロジェクトを定めた「福山駅周辺デザイン計画」を策定する事により、良質な民間投資を呼び込み備後圏域の玄関口にふさわしい駅前整備の再生を推進している。 ・この計画を基に、福山駅前アクション会議に参加する市民や事業者など実際にまちと共に成長する現場の人々が意見を出し合い実験を重ねてまた計画に繋げる策定プロセスは評価できる。 ・エリア価値を高めるために、4つエリアビジョンを示し、まちづくりの核である福山城及び、中央公園・中央図書館と福山駅、エフピコ等の商業地域や伏見町エリアを人の集まる拠点に設定し、拠点周辺や拠点間をつなぐ主要な範囲を「居心地がよく歩きたくなる区域（ウォーカブルエリア）」とした。ウォーカブルは単に歩行者を増やしたり、車両の排除が目的でなく、多様な人材との出会いや交流を誘発し、人や企業を惹きつける事を目指した点が、おおいに評価できる。 ・駅前再生に向けて、官民連携によるリノベーションによるまちづくりや、福山城築城 400 年記念事業を通じて、エリア価値や空き家対策を行いながらのまちづくりは、地域資源を最大限に活用し、新たなまちづくりが形成され、今現在も変化を続けている。 ・その結果、1日あたりの流動客集や駅周辺の商店街の営業店舗数を着実に増加させ、ウォーカブルエリア内の地価公示価格が12%上昇し、駅前の高層化にもつながっている。
<p>本市に反映できること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リノベーションのまちづくりを推進していく事が、先ずは第1と考える。中心市街地駅前商店街の活性化が、地下を上昇させ、人が集まり、賑わいを創出していくと感じる。 ・そのためには、民間投資がしやすい環境にするため、創業をサポートする環境や、空き家のリノベーションを活用しやすくするための施策が重要と考える。 ・そして今後の文化ゾーンを形成する美術館・博物館と中央公園・豊田スタジアムの東西軸にある本市のランドマークを中心とした、ウォーカブルなまちづくりを推進するためのソフト面の事業を打ち出していく必要がある。
<p>その他 (意見・課題など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本市でも中心市街地を中心に、一級河川の矢作川が流れ、毘森公園と中央公園をつなぐ、緑の環境軸を生かしたまちづくりを中心に福山市と同様にウォーカブルのまちづくりを目指しているが、行政主導での単なる「きれいなまち」になってしまった感じがする。福山市のように、住む人や起業する人が、民間投資がしやすい環境を考え、ここにいつまでも住みたいと思ってもらえるようなまちにする為に、今一度考えていかななくてはならない。



視察報告書【2】

委員会名	産業建設委員会	委員名	水野 博史
視察日時	令和5年8月2日（水） 午前10時00分～午前11時00分		
視察先・概要	福岡県福岡市 人口：1,639,832人（R5.7.1現在） 面積：343.47km ²		
視察内容	スタートアップ企業の支援		
選定理由	2012年、福岡市が雇用創出や経済活性化を目的としてスタートアップ都市を宣言してから10年以上が経過した。これまでに同市では、国家戦略特区の認定を受け、法人税負担の軽減や廃校だった小学校を改装し、官民連携により支援施設である Fukuoka Growth Next (FGN) を開設した。今回、FGN の視察を通し、その具体的取組を学ぶことで、本市の支援内容の充実化に資するものとする。		
豊田市の現状と課題	豊田市では起業・創業者等への支援として豊田市創業支援等事業計画を策定したほか、新たなイノベーションの創造拠点として SENTAN を開設している。また、愛知県においてもスタートアップ支援として STATION Ai を開設するなど、新たな産業を成長させるエンジンとして、その起爆剤となる創業・起業支援のすそ野が広がっており、市全体の活性化を図っていくために、先進的な自治体の取組を調査、研究する必要がある。		
視察概要	<p>●経緯</p> <p>将来的な産業の先細りを懸念する中、福岡市が空港、駅等から市内中心部へのアクセスがコンパクトになっていること、また人口規模や都市の特徴（学術都市、住みやすさ等）が同じでスタートアップの町として先駆的であったアメリカ・シアトルをヒントに、スタートアップ支援への取り組みを進めた。</p> <p>2012年、「スタートアップ都市・ふくおか」宣言を行い、2014年には閉校した福岡市内最古の学校（大名小学校）を活用し、2017年にスタートアップ支援施設 FGN の整備を行った。施設は市の助成金のほか、多くのスポンサー企業からの支援を受けており、そこからスポンサー企業とスタートアップ企業との協業も進んでいる。</p> <p>●スタートアップカフェ</p> <p>もともと市内の TSUTAYA に開設していた起業相談所を FGN に移した。コンサルジュが常駐し、相談対応するほか、司法書士や弁護士等の専門家による個別相談会を実施している。</p> <p>●ミッションとビジョン</p> <p>FGN のミッションとしては雇用創出や地域経済の発展に貢献すること。ビジョンとしては、未来のユニコーン企業として、企業価値10億円程度のスタートアップ企業を100社生み出すこととしている。なお2022年度末時点でユニコーン級の企業を3社輩出している。</p> <p>※当日は担当執行部（創業支援課）から、FGN 内会議室において説</p>		

	<p>明を受けた後、施設内の見学を実施。</p> <p>※ユニコーン企業：評価額が10億ドルを超える、設立10年以内の未上場のスタートアップ企業を指す。設立から間もないながらも企業価値の高い企業として、幻の動物ユニコーンに例えている。</p>
<p>評価とその理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡市がスターアップ都市を目指しきっかけとなったのは、地方都市から世界を変えるような技術やサービスを輩出していたアメリカ・シアトルの存在があり、福岡と比較した時の共通点が多い事に気づいた市長のトップダウンであった。 ・2012年に「スタートアップ都市・ふくおか」を宣言し、国家戦略特区に指定された。そこで、誰もが気軽に相談や起業・創業の視野を広げる為の「スタートアップカフェ」の開設がなされた。これらのプロセスが評価できると共に、FGNでは、「雇用創出や地域経済の発展に貢献」することをミッションとし、「未来のユニコーン企業」を100社生み出すことをビジョンとして掲げた。途方もない夢に向かって事業を進める中で、「福岡流エコシステム」の考えによるスタートアップによるユニコーン企業が誕生する創業循環システムを構築した。 ・ここには、他にない綿密に考えた戦略と、コンセルジュによる個別相談会を開催する事により、福岡で起業したい人材の獲得に成功している。 ・その結果、創業相談件数は10年間で10倍、資金調達額は10年で70倍、市内ファンド規模は10年間で5倍にも膨らみ、ユニコーン企業も2022年度には3社に躍進しているのは大いに評価できる。
<p>本市に反映できること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本市にも自動車産業分野では、どこの市にも負けない力があると思われるが、福岡市のように、企業やファンドの支援の形が出来ていない。「スタートアップカフェ」の設立も含め、起業の入口を低くし声をあげやすくすると共に、福岡市のノウハウをそのまま豊田市に持ち込められるようにするべきと考える。 ・行政主導の支援ではなく、民間を活用とした形になる事で、多くの企業意欲のある人材が集まり、福山市と同様に中心市街地でのにぎわい作りが、企業によって生まれやすい環境にしていく事が重要と考える。 ・また、スタートアップ支援だけでなく、人材のマッチングや起業後のフォローや専門家の個別支援もより専門的に踏み込んだものが必要。
<p>その他 (意見・課題など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本市にもSENTANというスターアップ支援体制があるが、根本的に福岡の取組とは違う。 ・福岡市は中心地にFGNを置くことにより、多くの方が気軽に相談に訪れ、その場で相談や商談が出来る環境になっている為、活気を感じた。



視察報告書【3】

委員会名	産業建設委員会	委員名	水野 博史
視察日時	令和5年8月3日（木） 午前9時30分～午前11時00分		
視察先・概要	熊本県熊本市 人口：737,181人（R5.6.1現在） 面積：101.80km ²		
視察内容	震災後のインフラ整備による地域経済のけん引		
選定理由	熊本市では、2016年に起きた熊本地震を教訓に、熊本の陸の玄関口である熊本駅・駅前広場の防災機能を強化することで、にぎわいと防災拠点としての再整備を進めてきており、今後の本市の施策を推進する上で参考になると考えられるため。		
豊田市の現状と課題	本市でも、名鉄豊田市駅周辺地区の再整備を進めているが、今回、震災後のインフラ整備として地域経済に大きな影響を与える熊本駅白川口駅前広場の整備状況を視察することで、本市における鉄道とまちづくりに関する施策の充実化や新たな視点の創出に資するものとして、取組を調査・研究する必要がある。		
視察概要	<p>●経緯</p> <p>熊本市では熊本駅から熊本城（市内中心部）まで距離があること（約2.2km）、駅北側の踏切による地域の分断、駅西側の木造密集市街地による不便なアクセス環境、駅東側地域の高度化利用が十分にされていない状況等が生じていた。九州新幹線の開通に合わせ、国・県・市で役割を分担しながら新幹線口駅前広場の整備のほか、市街地再開発事業等を実施した。</p> <p>●駅周辺の整備事業の効果</p> <p>整備の途中、震災の影響もあり、計画の見直し（大屋根の撤去等）を迫られることもあったが、整備後には駅の乗客数・駅前広場の歩行者交通量のそれぞれにおいて増加及び地価の上昇が確認された。大屋根を外したことにより、駅前広場は天候によってイベントの集客が左右される影響が生じるが、観光地という位置づけから、防災拠点としての役目を担うため、マンホールトイレや地下水の利用可能な汲み上げ可能なポンプをあわせて整備した。</p> <p>●その他</p> <p>熊本地震の経験を踏まえ、熊本駅周辺地域エリア防災計画を策定したほか、全国で初めて5つの路線バス会社の連携によるバスの共同経営を進められた。都心の市内中心部と副都心として位置付けている熊本駅周辺のアクセスを高めるためまちなかループバスの運行を開始、市内の回遊性向上が図られている。</p> <p>※当日は担当執行部（市街地整備課）から、会議室において説明を受けた後、熊本駅白川口駅前広場の整備状況を実際に視察を実施。</p>		

<p>評価とその理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・熊本駅周辺地域では、平成 23 年 3 月の九州新幹線（博多～新八代間）の開通に同時並行で連続立体交差事業を実施し、踏切遮断が無くなり、まちの渋滞を解消させた。この高架効果により、子ども達の通学や緊急車両や公共交通に大きな影響を与え便利で安全なまちへの変化をさせた。また東西間の移動がスムーズになり、利便性が向上すると共に、高架下での、駐輪場やオフィス、町の広場などの活用も推進された。 ・熊本駅白川口駅前広場では、熊本駅の改修に伴い広さを約 3 倍にしたオープンスペースではイベント開催による賑わいの創出や、災害時には復旧復興の拠点として活用する事になっており、市民の暮らしに密着する形で副都心の価値を高めた。また、商業施設を沿線地域で J R と連携したまちづくりも行った。その結果として、ワクワクする駅前広場に、人が集まり、イベント開催や、地価の上昇、更には商業施設などの雇用も創出できている点は大いに評価できる。 ・高架化による経済波及効果は、建設投資の経済波及効果で 710 億円。商業施設の経済波及効果で 353 億円と全体で 1,000 億円となった。 ・副都心となった熊本駅前広場に、人を呼び込むための移動手段も課題となり、全国初となる地元バス事業者 5 社連携による路線バス維持・拡充を図る共同経営にも踏み込んだ。この共同経営により、熊本の主要地域を結び、熊本駅と中心部との回遊性向上となった点も評価できる。
<p>本市に反映できること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・駅前広場を中心に災害時の防災拠点としての考え方は、本市にも反映していくべきと考える。マンホールトイレや手押しポンプなど、避難生活では重要な衛生面の視点を置いた整備は、災害を経験した地域の発想と感じた。 ・また、公共バスによる円を描いた回遊性の路線は、本市の中心市街地と都心 500ha 区域内を結んでいく必要がある。 ・また、駅前広場を常にイベント開催できる空間にしていく為に、商業施設との連携や、駅前広場の大きさや、音響等の備品も整備していく必要がある。
<p>その他 (意見・課題など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ J R という大きな武器が本市にも欲しいと改めて感じた。熊本駅前整備では、民間との連携と意思疎通ができてのまちづくりになっていると思う。本市も行政主導のまちづくりではなく、同じベクトルを向いての駅前広場整備が出来ると嬉しく思う。 ・ワクワクする駅前広場にするには、様々な形のコンテンツが必要となり、「賑わいと」「地価上昇」「住民増加」の歯車が良い方向に回り始めるよう、仕掛けが必要。

